

「安息の中で」

#### ヘブライ人への手紙 4 章

1 だから、神の安息にあずかる約束がまだ続いているのに、取り残されてしまったと思われる者があなたがたのうちから出ないように、気をつけましょう。2 というのは、わたしたちにも彼ら同様に福音が告げ知らされているからです。けれども、彼らには聞いた言葉は役に立ちませんでした。その言葉が、それを聞いた人々と、信仰によって結び付かなかったためです。3 信じたわたしたちは、この安息にあずかることができるのです。

「わたしは怒って誓ったように、  
『彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない』」

と言われたとおりです。もっとも、神の業は天地創造の時以来、既に出来上がっていたのです。4 なぜなら、ある個所で七日目のことについて、「神は七日目にすべての業を終えて休まれた」と言われているからです。5 そして、この個所でも改めて、「彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない」と言われています。6 そこで、この安息にあずかるはずの人々がまだ残っていることになり、また、先に福音を告げ知らされた人々が、不従順のためにあずからなかったのですから、7 再び、神はある日を「今日」と決めて、かなりの時がたった後、既に引用したとおり、

「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、  
心をかたくなにすることはならない」

とダビデを通して語られたのです。8 もしヨシュアが彼らに安息を与えたとするのなら、神は後になって他の日について語られることはなかったでしょう。9 それで、安息日の休みが神の民に残されているのです。10 なぜなら、神の安息にあずかった者は、神が御業を終えて休まれたように、自分の業を終えて休んだからです。11 だから、わたしたちはこの安息にあずかるように努力しようではありませんか。さもないと、同じ不従順の例に倣って墮落する者が出るかもしれません。

12 というのは、神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。13 更に、神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません。

\*\*\*\*\*

安息に入るとか入らないとかいう文言が出てきますが、私たちにはわかりにくい表現です。ここでの「安息」には3つのものが語られていますので、注意深く読む必要があります。

まず4節にある「神が休まれた」という「神の安息」

これは天地の創造が完成し、神が7日目を聖とし安息されたという完成による安息です。

天のすべて地のすべてを神様は完成されたのです。もっといえは私たちが住んでいるこの地上も、私たちが死の先に向かうであろう「あちらの世界」も神様は完成されました。

私たちの場所は用意されているのです。

それからイスラエルの人たちの歴史的な出来事としての「約束の地での安息」

これについては何度も彼らは心を頑なにしたため、そこには入ることができなかったと

書かれています。心を頑なに神に反抗し、元々の約束を信頼せず感情にまかせ

不平不満ばかりをモーセと神に向けてぶつけ続け、結局荒れ野での彷徨のまま第一世代は死に絶えました。

その後の世代になって約束の地に入ることができるようになりました。神への不信仰と

頑なな心が彼らを足止めさせてしまったのです。約束の地がなかったわけではありませんし

信じて進めばそこに行けたはずなのです。でも、彼らは信じませんでした。進みませんでした。それ自体神様への大きな、深刻な反抗でした。

神様はそういう状況の人たちを無理矢理約束の地に自動的に入れることはしませんでした。

実際は約束の地に入り、そこでの生活を継続する中でも彼らは頑なな心と不信仰で神様に反抗し、捕囚として他の国に追いやられたことがありました。

神様の言葉に対する反抗と不信仰はつねに彼らの状況を暗転させました。

私たちはそういう歴史的な出来事を一つのヒントとして、私たち自身の安息について意識を固める必要があるのです。

そこでヘブライ人への手紙の著者は「今、生きているわたしたちの安息」についての注意喚起をしているのです。

「私たちの安息」というのは「イエスキリストによる救いの完成」「イエス様の救いによる心の平安」ということです。

私たちの救いについて、イエス様が来てくださって教えてください、十字架に死なれ、三日目のよみがえられたことについて、私たちは、それが私自身の救いの土台であり、中心であり、イエス様のおかげで救いの中に置かれていることを確信して生きる必要があるのです。

その確信こそが「安息」なのです。

信仰という旅。救いを求めるという人生の旅。

イエス様はすべてを受け止め、私たちのために「救いの道」を拓いてくださいました。

私たちが何一つ付け加える必要はなく、信頼するだけなのです。

ところが、イスラエルの人たちがそうであったように「私たちの側でも何かしなければ救いは完成しない」とか「ここまで頑張らなければ神は救ってくださらない」という

思いが私たちの中にはとても強く育っていて、神様はすでに天も地も完成させておられることも、頑なになった人たちの失敗事例をたくさん教えられても、相変わらず、救われるためには「私が神様に対して何かしなければならぬのではないか」と意識してしまうことがあり、その件についての頑固さや頑迷さはとても危険なほどのものになっているのです。

11 節に「この安息にあずかるように努力しようではありませんか」とありますがこれは「この安息にあずかるように主イエス様の愛に注目し、神様が救いを完成させておられることに注目する」という意味なのです。

そして、それを吟味し、より深く理解するためにこそ聖書の言葉が用意されているのです。

12 節「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して心や思いや考えを見分けることができるからです。」

私たちは救いの完成、イエス様による心の安息の中に入れていただいているということを「聖書の約束」を通して知る必要があります。牧師に認められる必要はなく、他の人からの評価で決める必要もありません。聖書の言葉に常に身をさらし、整えられ、教えられながらイエス様の愛の深さ、神様の恵みの大きさを受け取り続けることができたならそれで良いのです。良い人ぶる必要も立派な信徒のような振る舞いも不要です。あなたはあなたのままで

聖書の言葉に身をさらしていけば良いのです。

救いのすべてはイエス様によって準備され、提供され、すでに執行されているからです。

そして、その判断基準は聖書の言葉です。それによって心を吟味する中で自分の救いの確実さが明確になっていきます。イエス様の救いに関する聖書の言葉や約束をしっかりと学び、感じ取り、受け入れることが求められています。頑なに拒むことなく、不信仰で放り投げることなく、キリストの愛に包まれていることを確認しながら歩むのです。それが信徒の安息であり、その安息を奪われないようにする必要があります。

どんなに病気の治療に役立つ薬がそこにあっても、その効果を私たちが知っていても、それを飲まなければ何の効果もないように、イエス様による罪の赦し、愛による満ち、ともにいてくださる安心感の内容を勉強して知っていても、それを信じることがなければ、その効果や祝福は心には深く届きません。勉強による感動はあるでしょう。でも自分の出来事としての癒やしや祝福の喜びとは比較になりません。

聖書の言葉を何度もゆっくり読み返しながら、それを頭で理解しようとするばかりでなく聖書の言葉そのものが心にもたらす「感じ」「雰囲気」「気づき」を自分自身で感じ取る作業がとても重要です。

頭での理解だけではなく、心で感じ取ってみるという作業は、説教からの教えや注解書からの理解の喜びとは別の「個別のみことば体験」として、心に深くしみこんでいきます。

そして、これは字が読める人であれば誰でもできる日常的に開かれているすばらしい方法なのです。

一緒に 12-13 節をゆっくり読んで何を感じ取れるか、時間を取ってみてください。

\* \* \*

MACF 礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/K8aHYGgYHpl>